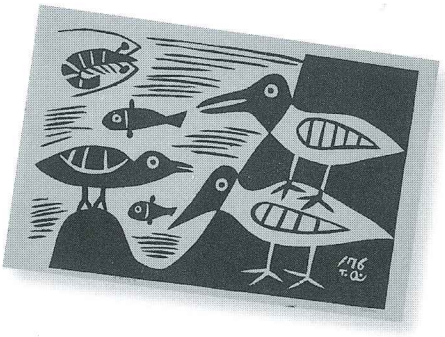

浅野竹二
――ゆまにすとの優しきドガチャガ

志賀 秀孝
SHIGA Hidetaka

浅野竹二さん（一九〇〇―一九九八）は京都に生まれ、日本画、油彩画を学んだ後、三十歳頃から木版画をはじめました。一九五〇年頃から、自分で彫り・刷る創作版画の手法を用い、明るく清らかに描かれた日本全国の名所シリーズが大変な人気を博しました。六〇年代頃から、モノクロで独特の画題を描く「自由版画」をはじめ、七〇年頃以降には色彩とともに、単純化や誇張も際だっていきます。八〇年頃から晩年にかけては、とめどなく湧き上がるイメージはもはや版画化されることなく、残材の厚紙に直接ポスターカラーで描きつけられ、「ドローイングシリーズ」へと展開していきました。

浅野さんの「自由版画」の世界はまさに破天荒で、どこか愉快で摩訶不思議な場面に満ちています。たとえば食うか食われるかの緊迫した場面。強者と弱者を、鳥と魚、釣り人と魚、カタツムリと鳥などを対峙させます。普通ならば、弱者が怯え、困惑し、逃げ出すでしょう。しかし浅野さんは決定的なこの瞬間に、驚きも悲しみも描きません。ひたすら相手と見つめ合わせるのです。また、生き物にとってのもう一人の敵、自分と対する場面も同様です。牛や鳥や女が、水鏡に映った己の姿を見つめます。そこに少しの情感も描かないところに、「自由版画」に込められた浅野さんの哲理があるのです。自己も含め、敵対する二者が対峙するとき、優劣や勝敗を決するのではなく、呆れるほどに互角に見つめ合い、認め合う。決定的な瞬間が永遠化されています。こんな作品を筆者はほかに知りません。

ところで、どの動物も命はたった一つですが、人間だけはもう一つ、社会的命を持ちます。浅野哲学はそこに何を語るのでしょうか。

今号の表紙の「父と子」（一九七四年制作）の場合、親と子をよく見ると、親の大きな手と子供の小さな手の間に〈隙間〉を彫り残しています。そこでは二つの解釈が私たちに委ねられています。次の一瞬、手をつなごうとするのか、あるいはこの子は親の抱擁から解かれて地面に降ろされ、離別、やがては死別への宿命がはじまるのか。このどうしようもない当たり前のことにテーマがあるのかもしれません。二人の着衣が〈横縞〉であることも、ペアルックと見れば愉快な場面に、漫画によく出てくる囚人服と見れば反対に哀しみの場面にも感じられます。正と負、表と裏との中間に立ち、決定的な一瞬を結晶化させています。親子の〈表情〉も、ここでもあえて無表情に描かれています。人といえども生き物である限り、運命には逆らえない。親と子の手の間の縮めようのない〈隙間〉には、そんな無力感を覚え、心が握りつぶされそうになります。加えて言うなら、二人の帽子の上の鳥らしきものも大きな謎です。鳥だけが運命をめぐる二つの解釈の行方を知っているのかもしれません。「自由版画」は、まさに様々な解釈が成り立つ音楽や禅問答のように感じられます。

浅野竹二さんは、これまで関西を中心に数回の回顧展が催された、よく知られた版画家の一人です。一九八一年に大部の『浅野竹二自撰木版画集』（京都書院）が出版されました。その冒頭で乾由明京都大学教授（当時）は、「すでに語るべきものを完全に語りきっているのである。浅野さんは、いわば自己の思想をすべて明確に視覚化し得た画家であり、したがってまた絵の中にのみ思想があることを信じて疑わない、まことに画家らしい画家であるといえよう」と最大の賛辞を述べています。また一九九三年には木村重信氏が図録『浅野竹二のグワッシュ作品集』の「序」の冒頭で、「浅野さんは、人物を模写したのでも、人物に関する観念を表現したのでもなく、ただ生産したのである。あたかも果実を生み出す植物のように」と評しました。木村氏は、フランスの古代壁画などの研究から人類の美的活動の根元を問い、美学と美術史学の双方の視点から現代美術に影響を与えた美学者です。自然に生まれるような絵画だとの浅野作品に対する評には、美術の始源に根ざしていると認めた木村氏の高い評価がうかがえます。

浅野さんは、よく謙遜します（卑下ではない）。自ら両親のことを「絵描きのなりそこねの苦労人」などと述べ、また、自分のことを芸術家や美術家などと言うより「へっぽこ絵描き」という言い方が好ましいとして、自分の作品は自分の「老廃物」だなどとも言います。この「へっぽこ」という語は、「絵描きに対する多少の侮りと親しみとを含んでいる」から好きだと、浅野さんは言っていました。しかし、もし私たちが浅野さんを「へっぽこ」と侮れば、浅野さんが用意した落とし穴にまんまと誘い込まれます。私たちは訝しがりながらも、呑気に浅野ワールドの中を進むうちに、いつしか私たちの体は無重力化し、ゆらゆらと宇宙遊泳のように奥へ奥へと吸い寄せられるのです。大切なことはこの浮遊感であり、ゆっくりと、安心して、自由に、ふかふかと、心地よく漂うひとときの楽しさが「自由版画」鑑賞の真骨頂です。ブラックホールを抜け、自分の身体に舞い戻ってもなお、作品という森の中で発した自分への反問は、まだ心の中でこだましている。他者の生命の全ては尊く、認め、諦め、許し合い、互いの自由を楽しみ、「なんだ君は私だったのか」と肩を叩きながら微笑み合い、敵と、自分と、見つめ合う。浅野作品からは、そんな浅野さんの呟きが、サクサクと版画を彫り、刻む音に紛れて筆者には聞こえてきます。

（しが　ひでたか・府中市美術館　主任学芸員）

リニューアルの辞

本誌『añjali』は、親鸞仏教センター発行の定期刊行物の一つである（ほか『現代と親鸞』・『親鸞仏教センター通信』）。各紙にはそれぞれ独自の使命が与えられているのだが、特に本誌には、真宗大谷派（東本願寺）が当センターを首都圏に設けた時からの願いがこめられている。

その願いとは、何よりも親鸞の思想信念を前向きに、現代に開いていきたいということである。そのために、まずは我々自身が現代の思想の問題に直参することが求められよう。そこでそれぞれの分野の最前線で活躍されている方々にお願いして、その分野における現代の先端的課題を提起していただき、その学びを広く読者と共有したいということであった。この願いを体現する誌名として、añjali すなわちサンスクリット語で「合掌」を意味する言葉が選ばれたのである。

親鸞仏教センターは、二十一世紀の初め（二〇〇一年）に立ち上がり、この二〇二一年で早くも二十年になる。本誌は毎年二冊ずつ発行され、すでに四十号を数える。これを機に、当センターのホームページにてウェブ版を公開し、一二月に従来通り紙媒体で刊行することとした。四十一号よりデザインを一新し、今後は毎号特集を組むなど、いっそう今日的な課題を問題提起できる形にリニューアルし、読者にさらなる関心をもっていただける雑誌を目指したい。

親鸞の思想信念を現代に開くには、大悲たる如来の願心に添って、現代の人間の問題を根源的に問うていくほかないであろう。そこには本願において一切衆生に「至心・信楽・欲生」と呼びかける教えがあり、なかでも親鸞が見たように、「欲生心」として如来の「意欲」が一切衆生に深く呼びかけていることがある。これは一切衆生の根源に、衆生を大悲して止まない如来の願心が、時代を超えてひそかにしかし能動的にはたらき続けているということであろう。その能動性を、時代に生きる人々と共に、常に新たに開示していきたいと願われるのである。

（二〇二一年一二月　親鸞仏教センター所長　本多　弘之）

［表紙の作家］
浅野竹二

版画家。1900年、京都生まれ。日本画家から木版画に転じ、自画自刻自摺の創作版画の手法で全国の名所を描いた風景画で人気を博す。繊細で軽妙な画風から事物の誇張や省略表現を進め、「自由版画」を確立した。独特の哲学と健康なヒューマニズムが交差する独自の世界をつくりあげた。1998年、京都で没した。表紙の作品は「父と子」（1974年作、自由版画。府中市美術館所蔵）

お知らせ

●『アンジャリ』第43号をお届けします。
●本誌『アンジャリ』の定期購読、並びに、バックナンバーのお求めとお問い合わせは、電話・FAX・Eメール等で、左記までご連絡ください。

『アンジャリ』　第43号
2023年12月 1 日発行

発行者　本多弘之（親鸞仏教センター所長）
編集・発行　親鸞仏教センター（真宗大谷派）
〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11
TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901
e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp
http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp

印刷・製本　アイワット
デザイン　北尾　崇（HON DESIGN）